

日	活動内容	評価		活動のようす
		全体	各班	
第 三 日	登山	A	A	登りコース 班を単位としての登山であるが、まとまっている。特に、6班のM子に対する援助は活発。
		B	B	山頂での休憩時各班ごとに固まっていた昼食であったが、他の班と合流したり、男同士、女同士の食事の光景が見られる。食後、876mの時からわきの1000mの山頂に挑戦するグループも出て、活発な動きが見られる。班としての特にまとまった動きはない。
		A	A	下山 各班ごとに1列になりまとまって下山。疲労のはげしい子ども目につくが、助け合って行動している。落後者なく全員そろって下山した。
9/6	キャンプファイヤー	A	A	火の神を迎える厳しやかな儀式の火、児童の態度も初めての経験でありながら、ともにキャンプファイヤーを作ろうという態度で参加しているようすが見られる。親睦の火での各班の出し物には、いずれも全員が参加しており、内容も工夫されている。全員で踊ったフォークダンスは男女のこだわりが見られず、楽しい輪ができあがった。
第 四 日	自由活動	A	A	班にこだわらず、自分たちの希望した活動に全員が参加した。それぞれの活動のグループは、学級にこだわらず、新しい仲間、同じ志を持つ者というようなふんい気の中で、子どもたち自身の手でグルーピングされた。
9/7				A オリエンテーリング組 自然観察組 水泳組 探検ハイキング組 B フィールドワーク組 フォークダンス組 目的なしのハイキング

単なる楽しい思い出づくり、仲良しになった、少し協力し合う気持ちが生まれたといった程度で終わってしまうにちがいない。少なくとも二泊以上の研修期間が必要と思われる。い、就寝時の児童のようすと変化

集団宿泊指導において、「睡眠」の指導の占める役割は大きい。生活時間について述べたように

福島県少年自然の家での睡眠の間は、児童の家庭でのそれよりも短かい。そこで、児童の健康管理翌日の充実した研修のためにこの睡眠をきわめて重要なものとしてわれわれはとらえている。

一般に、集団で宿泊することによる興奮、寝床が変わったことによる生理的、心理的な緊張から一

泊目の夜はなかなか寝つけない児童が多い。そのとき、それを放任することは、明らかに翌日の研修に影響が出ることを意味し、また他の団体への迷惑につながることになる。

この睡眠の指導こそ、集団宿泊の指導の核であろうと考えたい。「他人への思いやり」を持つこと

が集団宿泊生活のルールの基調となるものであり、すでに眠りについた仲間のために、他の団体の人のために、静かにベッドに身を横たえている——その姿の中に、友愛の精神、協同の精神の現れを見ることができると考える。集団の規律は、そうだったところから生まれてくるのではなからうか。

三泊四日の就寝の状況を眺めてみた。い。(五年生)

○一泊目……ロツジで就寝。消灯時九時三十分になっても明かりを消さないロツジがある。話し声が大きい。担任、所員が各ロツジを回り、「眠れなくともよいから、静かにしようね」「眠っている人もいるんだよ」「明日がつかいぞ」などと静かな語りかけの口調で話しかけ、眠りへいざなっていた。引率指導者も各ロツジに分かれて就寝。

便所に行く時の児童の話し声は大きい。十時三十分ごろまで話し声笑い声が絶えない。以後、しだいに静かになり十一時ごろ静かになる。

(翌朝「早朝経験」のため、午前四時三十分起床。午後は座学と休息)

○二泊目……宿泊室で就寝。九時二十分ごろから各部屋静かになり、九時三十分には、眠りには